

第 13 回

東海三県中学校修学旅行 研究セミナー要項

2015. 10. 16

名古屋ダイヤビル2号館

222会議室 (2階)

主催 東海三県中学校修学旅行委員会
公益財団法人 全国修学旅行研究協会

後援 愛知県教育委員会 岐阜県教育委員会
三重県教育委員会 名古屋市教育委員会

研 究 セ ミ ナ ー 次 第

13 : 30 開 会

主催者 あいさつ

東海三県中学校修学旅行委員会

会 長 今 井 雅 良

公益財団法人 全国修学旅行研究協会

理 事 長 岩 瀬 正 司

13 : 40 研究発表

○ 研究主題

「 学びの集大成につながる東京研修 」
－ 未来につながる生き方を学ぶ －

○ 発表者

岐阜県大垣市立興文中学校

校 長 宮 島 康 広 氏

教務主任 早 野 普 文 氏

14 : 25 研究協議

14 : 55 閉会のことば

東海三県中学校修学旅行委員会

副会長(岐阜県) 小野木 卓

15 : 00 閉 会

実践研究報告

「学びの集大成につながる東京研修」

— 未来につながる生き方を学ぶ —

校長 宮島 康広

教務 早野 普文

I はじめに 大垣市立興文中学校の概要

1. 学校の沿革と現在の様子
2. 学校の教育目標との関連

II 2014年度の実践

1. 修学旅行の位置づけと基本的な考え方
2. 事前の取り組み
3. 東京研修のねらい
4. 日程
5. 具体的な取り組み
6. 成果と課題

III 2015年度の実践

1. 2014年度の東京研修からの改善点
2. 具体的な取り組み
3. 成果と課題
4. 今後の改善の方向

I はじめに 大垣市立興文中学校の概要

1. 学校の沿革と現在の様子

大垣市立興文中学校(以下、本校)は昭和22年の新制中学発足と同時に開校した中学校で、大垣市の中心に位置し、古くからある住宅街と商店を中心とする繁華街が混在している地域にある。学校周辺には大垣城、芭蕉記念館、スイトピアセンター、市立図書館などの文化的施設が多く存在し、校区の人たちも「大垣藩」の名残を留めた伝統や文化に強い誇りを持っている。

大垣藩の藩校があった関係で、興文校区からは日本初の地震学者「関谷清景」、日本初の文学博士「南条文雄」、日本初の工学博士で鉄道工学の「松本荘一郎」、日本初の理学博士で後に東大総長となった「松井直吉」が輩出され、本校の卒業生にも、京都大学医学研究科の免疫研究でノーベル賞候補として新聞等で取り上げられたことのある中西重忠氏、東大放射線研究所の大橋陽三氏もおり、「博士の街 興文」と呼ばれることもある。教育目標は「聡明な人間」「豊かな人間」「たくましい人間」あり、「知・徳・体」バランスの取れた人材育成を目指している。また、生徒の間では「ひたむきさ」が生き方の精神として引き継がれる学校である。

現在では、全校生徒346名、教職員24名と最盛期の1/2の規模まで縮小したが、分譲住宅やマンションなどの再開発が進んで、今後、若干生徒が増えると予想されている。本校では過去に、野球部・バスケットボール部・バレーボール部が連続して全国大会に出場するなど運動面でも多くの実績を残しているが、近年では、合唱部がNHK合唱コンクール・全日本合唱コンクールなどで金賞を授与されるなど文化面での活躍が光っている。また、平成27年度から土曜授業を活用した「ふるさと大垣科」が始まり、ふるさと教育にも力を入れている。



<校舎全貌>



<全校合唱>

2. 学校の教育目標と研修で目指す姿

学校の教育目標は、「聡明な人間」「豊かな人間」「たくましい人間」であり、知・徳・体のバランスのとれた人材の育成を目標としている。従来から、本校の旅行的行事や学校外での活動は、学級づくりや学校で身につけた力を試す場であり、すべて研修であるという位置づけがなされている。したがって、「修学旅行」とは呼ばず、「東京研修」と呼んでいる。今回の「東京研修」でも、教科学習の観点では、今まで学習した内容を確認めたり、課題を持って調査したりするなどの課題解決学習へとつなげている。生徒指導面では、日頃の生活の中で身につけた、時と場に応じた正しい判断や行動力を試す場であり、保健体育的な観点では、健康・安全をはじめとした自己管理、特別活動の面では、係活動の中での責任と協力や学級として高め合う集団づくりを目指す場として位置づけ、学校生活で学んだことを行動目標として評価していこうとしている点が特徴である。平成26年度には、以下のような具体的な姿を生み出すことを目標として、学年の職員が重点的な指導をした。

学校の教育目標	自立を目指す具体的な姿	共生を目指す具体的な姿
聡明な人間	自ら考え判断して行動する生徒	仲間と共に学び高め合う生徒
	研修のねらいを達成するために、それぞれの場面で正しく判断し、行動することができる。	研修のねらいを踏まえたテーマを設定し、課題をみんなで解決する。
豊かな人間	自らを律し他者を理解する生徒	仲間を思いやり仲間のために働く生徒
	全体のことを考え、自分から進んで、役割を果たそうとする。	仲間の気持ちを考え、仲間と協力し合いながらよりよい研修にするために努力できる。
たくましい人間	充実した気力で困難に立ち向かう生徒	仲間と共に励まし合い、鍛え合う生徒
	計画を立て、先を見通すとともに、心身共に健康状態を維持する。	よりよい修学旅行にするために、互いに指摘し合ったり、励まし合ったりして活動する。

教職員は、研修における生徒の具体的な姿を意識した上で、東京研修中の生徒の姿を見ていくと、班別研修の計画段階でそれぞれの調査の場所を譲り合ったり、時間のロスがないような調査行程を工夫したりする生徒の良さが見えてくる。また、実際の研修の場では、生徒が互いの健康状態を気遣いながら調査を続けるなど、教育目標の観点で生徒の素晴らしさを見つけ、その後の振り返りの活動で位置づけることができた。毎年、学年部ではこの研修を通じて、つけたい力や求めていきたい姿を共通理解して研修に臨んでいる。

II 2014年度の实践

1. 修学旅行の位置づけと基本的考え方

前述のように、本校では「修学旅行」という呼び方はせず、「東京研修」と呼んでいるのは、文部科学省が宿泊的行事について「物見遊山的な内容から体験的な学習への変更」を通達したことを受けて、娯楽的施設等の活用は控え、あくまでも「学校で身につけた力が、実際の社会生活で生かすことができるかを確かめる研修」という位置づけとしているからである。大垣市内の多くの学校が千葉の施設へ行くこともあって、本校の生徒だけが行けないことへの不満を保護者や転校生から聞くこともあるが、学校としては「研修」としての姿勢を貫いている。

各学年の研修内容は以下のとおりである。

研修名	内 容
1年 琵琶湖研修	ウォークラリー・いかだ体験・キャンプファイヤー・飯盒炊さん・安土城考古博物館バックヤード見学
2年 若狭研修	民宿での干物づくり・養殖魚の餌やり・清掃ボランティア・魚の水揚げ体験・カッター漕艇訓練・民宿の人との交流
3年 東京研修	国会議事堂・憲政記念館見学・卒業生の講演会・浅草班別研修・都内班別研修・劇団四季観劇・第五福竜丸学芸員講話と展示館見学・江戸文化体験学級別研修

各学年においても、それぞれ目的をもって宿泊研修を位置づけている。

1年生は、「琵琶湖研修」と称し、新しい出会いの中での仲間作りに重点が置かれ、琵琶湖畔でいかだ体験のボランティアさんとの交流や安土城考古学博物館のバックヤード見学などを体験している。いかだ体験では、毎年、指導員の皆さんから「話を聞く姿」、「時間を守る姿」、「あいさつや後片付けの様子の素晴らしさ」をほめていただける。このことは、生徒が一生懸命学校内で取り組んでいる「空き教室の整頓」や「真摯な掃除の姿」などと結びつき、自分たちの取り組みの自信や誇りにつながっている。

2年生は夏季休業中の職場体験を念頭において、キャリア教育に重点が置いている。本校卒業生はふるさと大垣を離れて就職する人も多く、市内にある程度の就職の場があるにもかかわらず、人口流出が続いている。「若狭研修」では朝早くから働き、地元の自然や産業を守ろうとする漁師さんや温かい心でもてなす民宿の人たちから「故郷を大切にする生き方」にかかわるお話を聞き、自分のふるさとで働くことの意味や値打ちを考えさせるような工夫をしている。また、岐阜県が海なし県であることもあって、干物づくりやカッター訓練など、海での活動を積極的に取り入れるような企画をしている。しかしながら、天候の影響を受けやすく、1年生の研修と重なる部分もあり、内容の変更を検討している。

3年生は、学びの集大成として、社会科の歴史公民の授業と関連した「国会」「憲政記念館」

東北大震災や福島原子力発電所の放射能の問題を踏まえて「第五福竜丸展示館」での講話と見学、伝統文化の継承者の思いや苦労を知る「江戸文化体験」、一流の文化芸術体験や芸術鑑賞のマナーの確認として「劇団四季」での観劇、そして、仲間作りの集大成として「東京班別研修」を位置づけている。



<学級づくりの一環としての2年生研修旅行 元海上自衛官の指導の下で>

2. 事前の取り組み

どの学年も、研修の事前取り組みとして、「話し手の方を見て真剣に聞く姿」や「呼びかけあって時間を守る姿」「時間いっぱい取り組む姿」などを自分たちの活動として位置づけ、研修に臨む心構えを生み出している。

さらに、その点検項目を学年や学級で点検表に記録し、最終日までに完璧な姿を作り出そうと取り組んでいる。こういった活動を重ねることによって「全国学力学習状況調査」のアンケートの「学級みんなで協力して何かをやり遂げ、うれしかったことがありますか」というアンケート項目の結果は81.4%から89.8%へと上昇してきている。また、「友達と話し合うとき、友達の話や意見を最後まで聞くことができますか」でも、89.4%から95.9%へと上昇している。他の要因も大きいとは思いますが、宿泊研修という生徒にとって大きな意味を持つ活動で、事前の取り組みをやり遂げて、学校生活での充実感を宿泊研修につないでいこうとする意識の連続性を保つことは重要であると考えている。

学校生活の一部ではあるが、宿泊研修でも生かすことのできる活動として、充実した事前取り組みを完成する中で、仲間と協力し合うことやそれぞれが精いっぱい責任を果たすことなど生徒なりにその意義を見つけ、研修先での自分たちの姿を高めようとする意識は高い。



<授業での話す人を大切にする気持ちを込めて聴く姿>



<自分に任された場所をひたむきにやり抜く掃除>

3. 東京研修のねらい

東京研修では「学びの集大成」として次のようなねらいを設定している。

- ◎文化、政治、経済の中心である首都を自らの課題に沿って見学、体験、調査研究を行い見識を深める。
- ◎企業、事業所を訪問したり、人生の先輩の話を聴いたりすることにより職業や働くことに対する理解を深め、生き方について学ぶ。

◎計画、実践などの生徒自身の手による取り組みを通して、自主的・自律的な態度を身に付ける。

◎集団行動を通して、社会生活のルールやマナーを体得すると共に、相手の立場に立って行動する態度を身に付ける。

「学びの集大成」という理念は、最終学年として中学校生活の大きな節目を迎える3年生にとってはとても大切なことだと思う。たとえば、選挙年齢が18歳に下げられ、3年生で学ぶ公民の授業が大きな意味を持ってきている。安全保障関連法案のニュースが連日報道される今日にいたっては、国会議事堂の見学も今まで以上に大きな意味を持つことだと思う。社会科だけではなく、英語の教科書には、ガーナのカカオにまつわるフェアトレードの教材が掲載されているが、東京には日本フェアトレードフォーラムという機関があり、生徒の取材に応じてくれる。理科や技術家庭科の分野で言えば、日本科学未来館は様々な先端科学技術に関する展示があり、国際宇宙ステーションや深海探査艇、コミュニケーションのできるロボットなど、生徒たちが将来の夢や目標を描ききっかけとなるような施設である。また、東京に本社を持つ多くの企業が中高生を対象に職場体験を企画している。

東京研修をきっかけとして、生徒が今まで学んだこと、将来学ぼうとすることをより意義深いものにし、職業観につなげていくことは、東京でしか体験できない学びであり、中学校生活での学びの充実につながるものである。



国会議事堂見学は、18歳での選挙権の導入によって新たな意味合いを持たせる必要も想定していかなければならない。国会議事堂見学後に公民で選挙権や国会の仕組み、内閣や裁判所との三権分立等を学ぶことになるので、単なる記念には終わらせたくないところである。本当の意味で、学びの集大成としての「東京研修」あるいは「修学旅行」とすることは非常に難しいことであり、学校の教育課程の中での位置づけを真剣に考え、生徒や保護者の「友達との楽しい旅行」的な意識を今後どのように改めていくかは大きな課題だと思う。

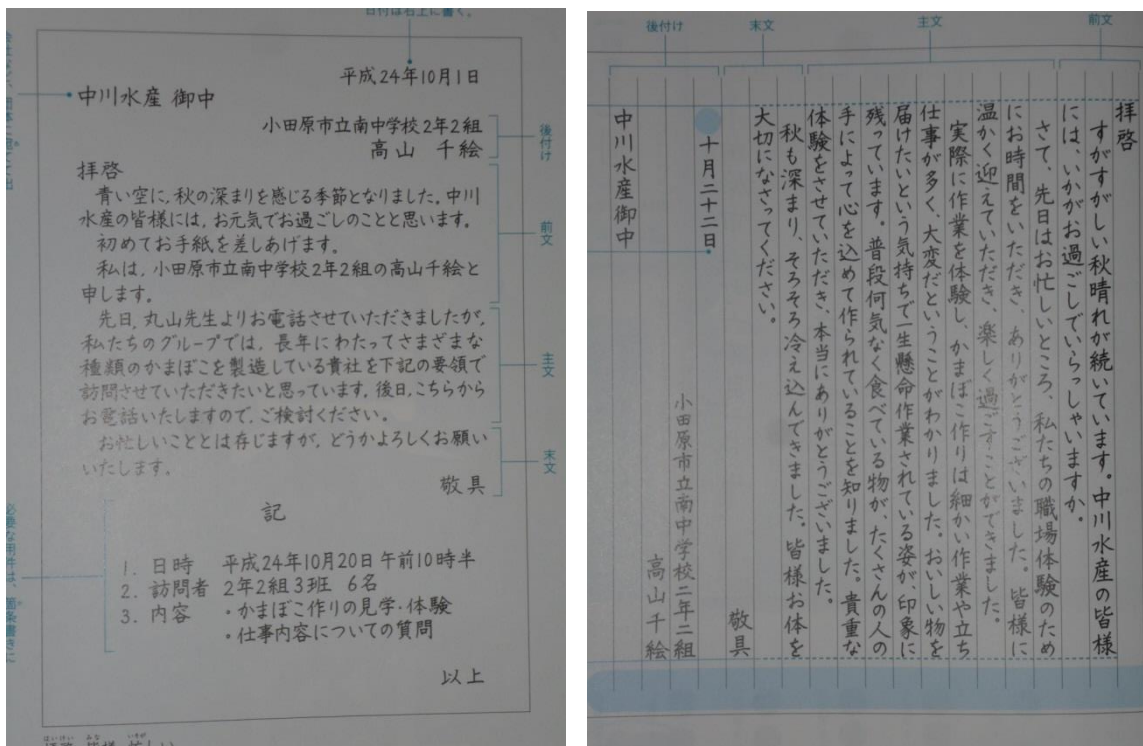


<日本科学未来館 コミュニケーションロボットの展示>



<航空機の誘導体験>

「学びの集大成」という意味では、もう一つ、生徒が学習したことや学校生活で身につけたことを生かす機会にするという観点がある。その一例として、書写の時間に学習した職場体験の依頼状と礼状の学習を生かして、生徒自身が見学の依頼状や礼状を書くというものである。



<書写の教科書にある礼状に関する箇所>

国語科として、お礼状を書く内容や表記について、次のようなことを指導している。

相手に思いが伝わるように、次のような観点でお礼状を考えてみよう

講演や体験を通して

- ◆心に残ったこと・言葉・姿など
- ◆職場体験を通じて、難しかったこと、大変だったこと
- ◆楽しかったこと、やりがいを感じたこと
- ◆学んだこと、これからの生活で大切にしたいこと
- ◆今までと考えが変わったこと
- ◆お世話になったことに対する感謝の言葉

表記に関する注意事項として、丁寧語（尊敬語・謙譲語など）、漢字を正しく使いましょう。

詳しく書けば書くほど感謝の気持ちが伝わります。具体的に書きましょう。

このように学校で学習したことを確かめ、実際の生活に広げることも「学びの集大成」とすることと感じている。

さらに、「学びの集大成」として、学校で培った道徳的実践力や公共の場でのマナーが、学校や家庭とは違う場所でも発揮できるかという観点でも、生徒の成長を確かめたいと思っている。東

京駅に近づくと委員が中心になってゴミを集めるのではなく、生徒一人一人が意識して自分のゴミを自分で持ち帰り、倒していたシートやテーブルを元に戻して速やかに新幹線から下車する姿があった。集団で横断歩道を渡る時も高齢者やベビーカーを押している女性に配慮して自ら道を譲り、小走りで列に戻るといった姿もあった。ごく少数の生徒を除いて、疲れていても講師の方の話を、メモを取りながら熱心に聞き入っており、その後の質疑でも積極的に質問をするなど、授業での姿に結びついている面も多かった。時間を守ることも全員が意識して行動できたし、女子生徒はバイキング形式の食事の後でも、食器をまとめておいたりテーブルをふいたりするなど、細かな心遣いをすることができた。こういう点では、学校教育で日頃培ってきた道徳的实践力や公共のマナーを守ることでできる生徒の姿を確かめることができた。

ただ、観劇の経験のある生徒はほとんどなく、劇団四季での途中入場・途中退場ができないルールやスタンディングオベーションのタイミングなど、こういった企画に参加しない限り、経験できないということを感じた。逆に、本校では、東京研修でしか学べないこととして大切にしていきたいと感じている。

4. 日程について

5/12(月) 学校 ― 岐阜羽島駅 ― 東京駅 +++ 国会議事堂……………昼食……………
 6:55 7:35 8:13ひかり508号 10:10 10:50 12:00 12:15 13:05

…日本橋社会教育会館(先輩講演会) ++ 浅草(班別) ……(夕食) ―― ホテル(泊)
 14:45 16:40 18:00 19:15 19:45

5/13(火) ホテル……………東京都内班別研修(昼食も班毎)……………夕食…劇団四季(ミュージカル)
 8:30 17:00 18:10 21:45
 ホテル泊
 22:00

5/14(水) ホテル ―― 夢の島マリーナ・第5福竜丸(講話・見学) ―― 学級別研修 ――
 8:40 9:20 11:40 15:50
 東京駅 岐阜羽島駅 興文中学校
 16:33ひかり501号 18:29 18:50 19:20頃到着、19:40解散予定

5. ねらいを実現させるための具体的な取り組み

本校の東京研修で最も特徴的なことは「卒業生による講演会」である。2014年度は、本校卒業生のピアニストである木曾真奈美さんの講演会とピアノ演奏会・感謝の合唱を行った。木曾さんは、興文中学校卒業、菊里高校を経て、東京芸術大学卒業、同大学院修了。中学校在学中に、

名古屋フィルハーモニー交響楽団と共演、ベルリン弦楽四重奏団の一員としても活躍した。ロシアのチャイコフスキー音楽院を首席で卒業し、日本人で唯一チャイコフスキーの遺品であるピアノの演奏を許された。講演では、中学生時代から持ち続けた夢と実現への努力、ピアノと学業の両立、興文中学校の精神である「ひたむきさ」について語ってくださった。その後、高度なピアノテクニックによる演奏を披露してくださった。

その中で、木曾さんは、「中学生時代は、好きなことを見つける今であってほしい」「人生は航海。どちらへ進むかは自分が決めること。人生の決定権は自分にしかない」「褒めてくれる人を信じて続けてきた」「誰もが持っている力を使うか、使わないかが分かれ目」というような、後輩へのメッセージを伝えてくださった。



<本校卒業生の木曾真奈美さん>



<ロシアの作曲家ラスマニノフの手の大きさを解説する木曾真奈美さん>

<生徒の体験も交えた楽しい雰囲気での講演>



生徒の感想

- ・夢を叶えるためにはたくさんの努力が必要なこと、その努力をし続けるためにはそれだけ打ち込める好きなものを見つけることが必要だとわかりました。
- ・自分たちの身近なところにこんなすばらしい先輩がいることを知り、嬉しかったです。
- ・努力は必ず報われることが分かり、「自分も頑張らなければ！」と思いました。
- ・周りの人よりスタートが遅くても---たくさんの努力を積み重ねれば、追いつき追い越すことも出来ることがわかり、あきらめてはいけないと思いました。
- ・部活動と勉強だけでも大変なのに、ピアノの練習とレッスンまで両立させて木曾さんはすごいなあと思いました。夢をかなえるために自分でスケジュールを立ててやりきるなんてすごいです。自分もできるところから頑張りたいと思いました。
- ・お話を聴いて将来に向けての考え方が変わりました。今まで自分は勉強が苦手なので「やってもどうせダメだろう。」といい加減に考えていました。今は苦手でも努力すれば力を伸ばすことができると知り、自分もあきらめずに頑張ろうと思いました。
- ・好きなことのためならどんなにつらくとも強い気持ちを持って頑張れることを知りました。自分はまだ夢と言えるものがはっきりしていないけれど、目標をはっきりさせて頑張ろうと思いました。ピアノの演奏がとても素敵でした。
- ・強い気持ちを持つことが大切だとわかりました。進路だけでなく日常生活でも強い気持ちを持って努力していけば目指していることを達成できることがわかりました。
- ・努力をし続ければいつかは人に認められるのだとわかりました。自分も簡単にあきらめたりせずに頑張っていきたいと思います。

3. 成果と課題

平成26年度 東京研修の振り返り

【先輩講演会について】

- 身近な先輩の中学生時代の話や進路を切り開いていった努力など分かりやすく話していただけて大変ためになった。「未来につながる生き方を学ぶ」にふさわしい講演会だった。
- 話し口調も柔らかく好感が持てた。ホールも適当な広さで距離感も近くよかった。
- ピアノコンサートは、本格的な雰囲気醸し出しながらも、堅苦しくなく、楽しんで聴くことができた。
- 生徒たちはその演奏から、ピアノの演奏技術を維持するための日々の努力を感じていた。御礼として学年合唱を披露したが、できれば木曾さんと共に校歌を歌いたい。

【第五福竜丸講話について】

○学芸員さんの話は分かりやすくよかった。全員が真剣に聞くことができていた。

●会場が体育館だったため、声が響いてしまい、やや聴きづらかった。ここ数年「福島原発事故」を意識して放射能汚染等について学んできたが、来年は終戦70年ということもあり、戦争について考える企画にしたい。

●第五福竜丸については、社会科でも取り上げる機会が少なく、本校が目指す平和教育の一環としては、やや物足りない内容であった。特に、事前学習をしているので生徒たちの関心が低くはなかったが、より良い講話や施設見学の可能性を模索したい。

＜生徒の感想＞



広島・長崎だけでなく、その後の水爆実験で日本人が放射能の被害を受けたことを知らなかった。第二次世界大戦後もアメリカやソ連が核実験を行い、多くの人々が放射能汚染の被害を受けていた。それでも原子力発電所は建設され、スリーマイル島やチェルノブイリでも多くの人々が犠牲になった。安全と言われたのに、東北大震災でも福島原子力発電所の汚染事故があり、今もふるさとへもどれない人たちがいることを考えると、原子力を使うことの問題を身近に感じる事ができた。学芸員さんの話から歴史を知ることは自分たちの今の生活を考えることにつながると感じた。

＜第五福竜丸展示館＞

【学級別研修について】

江戸文化体験として学級単位で「江戸風鈴製作体験」「雷おこし作り体験」「からくり屏風つくり体験」を行った。今年度は、講師の説明によって製作活動を行っただけであったが、若い講師が江戸文化としての残る統的な技法について勉強し、その継承者となっていることが印象的だったという生徒の感想があった。たまたま、江戸風鈴を体験したお店が、江戸風鈴発祥の店ということもあって、若い職人の方がその仕事を選んだ理由や収入だけで選ぶのではなく、技術を

伝承していく人がいなくなることの問題について話をしてくださったからだった。このことは、来年度以降の研修のあり方を検討する材料となった。

最終日の午後の活動ということもあって時間的な余裕はないが、東京駅へ集合するまでの時間はバスで東京都内の観光ができることと最後のお土産購入時間が確保できることもあるので、生徒にとっては印象に残る活動である。帰宅後に自分たちが絵付けをした風鈴が送られてくることも好評である。「雷おこし作り」はその工程での食材が大きく膨らむ様子や手作りのお菓子をお土産にできることもあって好評であったが、「からくり屏風」は作業時間が長く、丁寧な作業を求められるので、疲れている生徒にはやや不評であった。



<高熱炉の前で風鈴のガラスを吹いている生徒>



<からくり屏風の説明を聞く生徒>

【全体の日程について】

〈1日目〉

○夕食後は、ホテルに直行でホテルでの時間にゆとりがあり、入浴などがスムーズでよかった。

- 講演会のホールの関係で昼食後時間を費やす必要があったため近くの憲政記念館での見学をしたが、生徒の憲政記念館の展示物への反応は今ひとつだった。
- 浅草班別行動の時間をもう少し確保できると、翌日の班別研修の際の時間の行動を考えるチャンスにできたと思う。マナーを守って飲食や買い物をしている姿はとても良かったが、時間を意識していなかったため、集合時間ギリギリに集合した班があった。

〈2日目〉

- 当日、班別研修出発直前に地震があった。ホテルは耐震性に優れていたため全く揺れを感じなかったが、最寄りの駅に着いた班から電車が運転を見合わせていることが伝えられ、その直後テレビで地震があったことを知らせていた。班に一つ携帯している携帯電話に最寄り駅で待機するか、ホテルに戻ることを指示した。この時、GPSでそれぞれの班の位置を確認し、担任が移動しながらそれぞれの班の安否確認をすることができた。
- 8時30分に班別研修に出発して、8時50分には全員の無事を確認したが、学校への連絡が遅れたために、学校では保護者から問い合わせの電話が殺到していた。これが出発直後でなく、昼頃だったら、全員の安否確認をするのにかなりの時間を要したことになる。東京にいた私たちの感覚とテレビで地震を知った保護者との感覚の差も大きかった。学校から全員無事であること、引き続き班別研修を続行できる状況にあることをメール配信し、保護者の安心感につなげることができた。
- 班別研修がとても計画的で順調に進み、全員が夕食会場に早めに入ることができ、到着報告もスムーズにできてよかった。
- 班別研修の内容が、渋谷やスカイツリーなど観光地の買い物をメインとしていた班が多かった。
- 夕食会場がビルの店舗内でオープン時間まで入れなかったため、早く到着した班を待機させる場所を事前に確認しておくよかった。150人が居場所なくフラフラしているような状態となったことは反省点である。
- 夕食後、劇団四季の劇場までの移動が便利でよかった。
- 終演時刻の関係でホテルへの帰着が遅くなり、入浴から就寝までが時間的に厳しかった。

〈3日目〉

- 時間的に無理のない行程で昼食の時間もゆとりがあってよかった。東京駅前では学級写真を撮るだけの時間的余裕があったのはよかった。
- 江戸風鈴づくりの研修場所では、職人さんたちに仕事の質問をする時間があり、伝統文化を守るのは、若い人の気持ち次第だという話があり、生徒たちは感銘を受けていた。
- 駅構内で長時間待つこともなく、ほどよい時間で動くことができた。

Ⅲ 2015年度の実践

1. 2014年度の東京研修からの改善点

「学びの集大成」という視点で今後の研修について運営委員会で討議した。社会科公民・あるいは近現代史、さらに選挙年齢18歳への法改正の観点から国会議事堂見学はじめ政治の中心地としての東京での学びは今まで以上に意味を持つものと考えられた。また、ここ数年「福島原発事故」を意識して放射能汚染等について学んできたが、来年は終戦70年ということもあり、戦争について考える企画へと変更することを確認した。

さらに、班別研修が渋谷や原宿などを中心に散策するなどやや観光化していたため東京でしかできない体験や、将来の職業選択につながるキャリア教育の色合いを持たせることにした。

江戸文化体験も「からくり屏風」は生徒に不評であったため、「江戸切子」へと切り替え、職人さんに質問するような活動も取り入れることとした。

2. 具体的な取り組み

平成27年は、戦後70年ということもあり、「第五福竜丸展示館」から「東京戦災センター」へと見学先を変更した。ここでは、学芸員による解説のほか、空襲体験者のさんから体験談をお聞きし、平和に対する感謝や歴史的意味を深めさせたいと考えた。



<東京空襲被災者の話に聞き入る生徒>



<東京戦災資料館で取材する生徒>

また、東京班別研修を政治経済あるいは科学に関する施設での調べ学習へと重点を移し、企業訪問なども取り入れて、体験学習の色合いを濃くした。平成27年度に東京班別研修の対象として生徒たちが事前にはリサーチした施設・会社（事業所）名は以下の通りである。

東京証券取引所東証アローズ	NHK スタジオパーク	東京都中央卸売市場築地市場			
警視庁	Avex・グループホールディングス	篠原風鈴本舗	国土交通省	江戸切子おじま	
気象科学館	ユニセフ	読売新聞東京本社	すみだ江戸切子館	TEPIA デジタルプラ	
ザ 上野動物園	カナダ大使館	集英社	スウェーデン大使館	造幣局	東京都庁

東京葛西臨海水族園	印刷博物館	インド政府観光局	インドネシア共和国大使館
江戸下町伝統工芸館	北区防災センター	品川エポックミュージアム水族館	シンガポール共和国
森林文化協会	ユニエクスプローラーサイエンス	地下鉄博物館東京	おもちゃ美術館
東京染めものがたり	東京都水の科学館	東京みなと館	日本科学未来館
日本ナショナルトラスト協会	日本弁護士連合会	深川江戸資料館	
農林水産省「消費者の部屋」	ANA機体整備場	JAL機体整備場	

見学を受け入れてくれる企業は生徒自身がインターネットを使って検索し、教員が文書提出をフォローする形で依頼した。今年度も、終了後には手書きの礼状を出すなど、書写で学んだ「礼状の書き方」を実際の社会で活用できる力が身についているかを試す機会となった。航空機の整備工場では規則や規定を確実に守ることや日々の技術の向上が大切なお客様の命を守ることにつながるなど、学校生活では学べない働く人の影の努力や勤務姿勢を学ぶことができた。移転を前にした築地市場でも、事前に依頼した解説の方が普段は入れない倉庫や市場内を案内していただいた。普段目にしたことのない魚や早朝のセリについて興味深く説明を聞いていた。

江戸伝統文化体験では、江戸切子の繊細な作業や江戸風鈴の高温の作業場での仕事の過酷さを体験すると共に、自分たち自身で江戸切子や風鈴を製作した。その中で、伝統技術を継承する若い職人さんたちに質問をし、受け継がれた技術が東京の中小工場の精緻な技術力を支えていることや、収入の多い少ないで仕事を決めるのではなく、自分が社会のためにどのように役立つ人生を送るのかを学ぶ機会とすることができた。

一方で、生徒たちは「スカイツリー」へ上って「ソラマチ」近辺で買い物を楽しんだり、「築地市場」で海鮮丼を味わったり、「フジテレビ」でイベントを楽しんだりするなど、楽しい思い出づくりも上手に取り入れていた。事前に調査した地下鉄の乗換えやルート検索がうまくいって予定以上の場所を回った班もあり、リーダーと仲間の信頼が深まる班別研修となった。



<伝統的な技術が、町工場を発展させ、日本の工業技術につながる話を聞いた江戸切子体験>



<外国人の多さに驚いた浅草寺>



<キャビンアテンダントの体験は女子生徒に好評> <仕事の正確さを学んだ整備工場>



<造幣局での経済の仕組みの一端を学ぶ> <築地市場でセリの仕組みの説明を受ける>

昨年度の地震の教訓を受けて、班別研修では、職員が常時本部のパソコンの画面上で各班の現在地を確認し、集合時間に遅れそうな班とは頻繁に連絡を取るなど、全員の状況把握を常に行い、担任への連絡も頻繁に行った。

3. 成果と課題

<成果>

「学びの集大成」という観点で本校の「東京研修」を振り返ってみると、社会科に関係する歴史・公民的内容の学習のほかに経済や地理に関する分野の学習の一助となっている。また、英語の教科書に記載されている「フェアトレード」の話を大使館や日本ナショナルトラスト協会への取材で聞くことができ、国際社会への関心も高まった。また、書写の授業で学習する手紙の書き方等を活用して「依頼状」「提出書類」「礼状」などを実際に記載するなどの経験もできた。日本科学未来館では、最新の科学技術に触れ、理科や技術家庭の興味関心へと結びつけた。特に、生徒の感想では、ANAやJALの機体メンテナンスセンターなどの企業で働く人や江戸切子などの伝統文化を引き継ぐ人たちの生の言葉に心打たれ、職業人として働く人たちの気持ちを学べたことは大きな収穫であった。

<課題>

一部生徒の社会的なマナーの欠如を感じたことである。劇団四季の観劇の際勝手に空席に荷物を置いたり、遅い時間に観劇を終えてホテルに戻った際、一般客がいるにも関わらずエレベーター待ちの場所で大きな声で話したり、朝食の混雑時に廊下で広がって歩いたりしていたことである。学校生活では自分たち中心の生活を送っており、ホテルなど公共の場に出た時に、周囲への配慮や社会的常識やマナーがしっかりと身につけていないなど感じる部分があったことは反省点である。

4. 今後の改善の方向

- ・生徒の研修旅行のとらえを、「学校から連れて行ってもらう旅行」から「何かを学び取るための研修旅行」という意識を継続していくことができたので、今後も継続していきたい。
- ・事前学習で、時と場に応じた「公共の場でのマナー」についても指導していく。集団での移動や交通マナーなどの姿はたいへん良いが、公共の場所での周囲への配慮に欠ける声の大きさやバイキングの食事の際のマナーなど、指導できる点は事前に指導していくことを職員全体で確認した。
- ・東京研修の後、1年当時の学年委員長さんから業者入札時の提案から業者からの提案内容が変わってしまっていたことに対してご意見があった。当時、パンと牛乳程度の簡易な食事だけで避難所に指定した所に集合するような提案があったようだが、学校・旅行会社共に担当者が変わっていたせいもあるが、引継ぎがされないまま前年度とあまり変化のない内容で実施したもので、落札時の記録や引き継ぎを徹底する必要がある。
- ・岐阜県中学校長会事務局を通して、新幹線の団体利用を活用している。料金が割引され保護者負担が軽減されておりありがたいのでぜひ継続したいと考えている。しかし、一部の保護者の中には、負担が増えても良いので、天候に影響されにくく、部活動の大会や学校行事に支障のない5月中に実施を希望する保護者が増えてきている。今年度は6月半ばの実施であったが、市教育委員会の訪問や研究会の実施等、期末テストの準備など、教職員にとっても大きな負担となっていたため、団体列車の利用について検討したいという声も挙がっている。

正直に言うと、東京ディズニーランドや渋谷・原宿へ行くことがメインとなってしまった修学旅行はあまりにも娯楽的な要素が大きく「学を修める旅行」という本来の修学旅行の姿とはかけ離れていると感じている。生徒指導上の問題が多かった頃は、東京ディズニーランドでの生徒の管理は有り難ささえ感じたものである。しかし、時代の趨勢で家族と頻りにディズニーランドへ行く機会があることを考えると、修学旅行の在り方自体を真剣に考える時期が来ていると思う。

今回、この発表を受けた時、「学びの集大成としての修学旅行」という言葉は、改めて本来の修学旅行の在り方を考えるきっかけとなった。本校の「東京研修」は、事前に「学びの集大成としての修学旅行」を意図したものではないけれども、興文中学校が大切にしてきた「学び」に対す

る考え方や生徒の調査・体験活動を主体とした旅行的行事の在り方は、このことに結びつくのではないかと考えさせられたからである。

「学びの集大成としての東京研修」を実現する手立てとして、次の4つの観点を意識して今後の東京研修を企画することを提案したい。

- ① 今後、選挙権の拡大や公民権教育の観点での事前学習を充実し、国会見学などを単なる見学に終わらせない工夫を考える。(今回の東京研修の折にもデモが行われていた。)
- ② キャリア教育として大手企業のリサーチや職場体験、目的を持った科学館・博物館・美術館の見学、個人では経験する可能性の低い観劇の体験など、東京でしか体験できないことを企画した上で班別研修を行う。
- ③ 学校の授業で学んだことを社会生活で生かす機会がないかを再検討する。
- ④ 学校で培った道徳的実践力や公共の場でのマナーなどを社会生活の中で見届け、学校教育や家庭教育での指導の観点としていく。

